宝村

桂川沿いには川棚、大幡川沿いに金井、中津森、大幡といった村が連なっている。また加畑川沿いには厚原、加畑、平栗の集落が展開している。それぞれの旧村堺が地図には点線で示されている。宝村という村名は、南都留郡町村取調書によると「七ケ村ハ七福神なりとて宝村と称したりしぞ」と由来を記している。

地図によると村役所は中津森の江西院にあって、加畑川沿いの平栗や加畑などの村々に入りやすく、また一番大きい集落のある大幡に近いという地理的な条件から選ばれたのだろう。とくに中津森から北都留郡の初狩村に至る近坂が通っていることも大きい。この近坂道は単に中津森などの村々にだけでなく、郡内の村々にとっても甲州街道に出るのに便利な道路として重宝がられていた。とくに明治一〇年代には地方税や人民の寄附金によって改善されていた。こうした交通上の利点があったところに村役場があり、そこに掲示場が設置されていたのである。

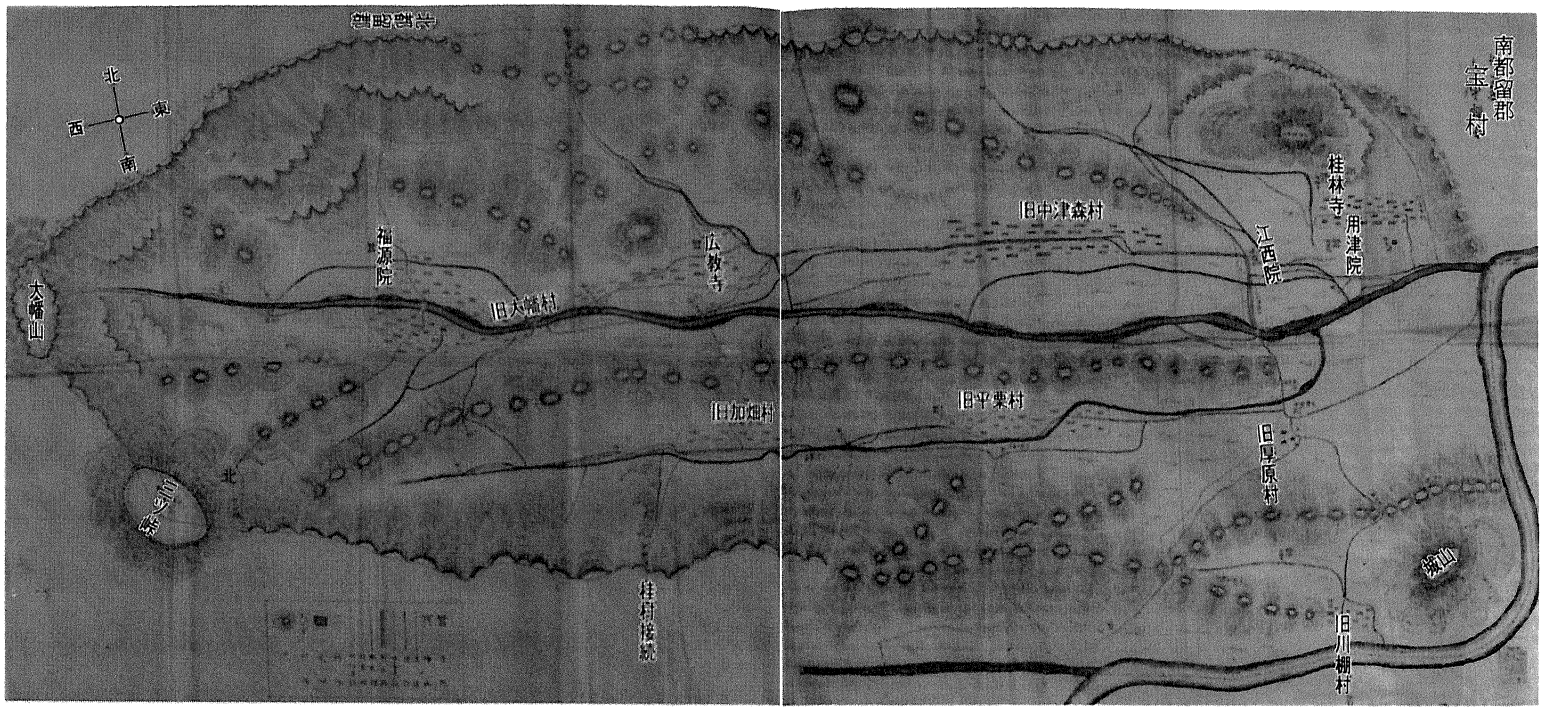

図1-3　明治14年宝村絵図（山梨県立図書館所蔵）

学校は、大幡、中津森、そして平栗の三か所に設置されている。その場所は、地図のうえでは旗が描かれている。いずれも明治六年一〇月から翌年三月までの間に開校している。

大幡、中津森や平栗などに小規模な堰があって二〇～一〇町歩ほどの田に水を引き入れていた。地質は必ずしも良くなく、穀類のなかでは大小麦、野菜では大根が最も多い。また桑も多く栽培されていた。この村の農業者は三八六戸であるが、そのうちの三五二戸が養蚕を兼ねていた。その他、工を兼ねるものは四一、商に属する者は七〇、猟師が九、漁師も一である。市郡村誌の戸数は四四一、人口は二四八五（男一二〇九、女二〇七六）である。他への寄留は八三、他よりの寄留も一二四ある。

神社は大幡にある郷社の船形神社が際立って大きい。ほかには各地に八幡社（金井）、浅間社（平栗）、春日社（中津森）などがある。寺院では広教寺、桂林寺、用津院、福源院で、ほか正観寺、江西院、専念寺がある。